

第二言語・外国語としてのイタリア語教育におけるラテン語 – Il latino nella didattica dell'italiano L2 (Lingua Seconda) /LS (Lingua Straniera) –

Laura SABATTOLI
ラウラ・サバットリ

現代のイタリア語には、多くのラテン語が含まれている：*Virus*（ウイルス）、*humus*（大地）、*bonus*（ボーナス）、*referendum*（国民投票）、*facsimile*（ファックス）、*lavabo*（洗面台）など、その意味を十分に理解して日常的に使っている。多くが、日常会話のイタリア語、そしてイタリアの方言に浸透しているラテン語は、聖職者・弁護士・公証人が使うラテン語であり、あるいは裁判所関連に使用されるラテン語である。

1800年代に使われていたイタリア語は、ラテン語からの借用語で溢れていたが、1900年代になると、その使用は次第に減少していった。¹ しかしながら、現代のイタリア語におけるラテン語の存在はまだ顕著であり、語彙論の問題だけにとどまらない。しばしば、それらはラテン語やラテン語文学のレパートリーから引用されたものであり、その引用は、学校教育の遺産であり、カテキズムで読まれミサで耳にする宗教上の語句（2番目のケースは多分昔のほうがより頻繁であった）あるいはラテン語がヨーロッパの学問のリングア・フランカ（共通言語）であった時代の学術論文の遺産であることを示唆している。

日常会話の中で、話し相手と学校時代やそれまでの人生の思い出に多かれ少なかれ共通するものがあるとき、時として、我々の学校教育で培われたラテン語の引用句を、思わず会話のなかに、あるいは書き言葉のなかに、挟み込んでしまうものである。たとえば、ラテン語での常套句、有名な言い回し、表現、格言やことわざなどである。

実際、現代イタリア語におけるラテン語の存在は、イタリアの学校教育システムの在り方も考えると、納得の行く説明を得られるであろう。2002年のモラッティ改革法（Riforma Moratti）の導入後、規模は少々縮小されたとはいえ、イタリアでは今日でも若者の約25%、つまり260万人の学生のうちおよそ70万人に相当する学生たちが、高等教育で伝統的に教育カリキュラムに必ず含まれる教科であるラテン語を学んでいる。²

5年間の教育課程の間、文科系高等学校（Liceo Classico）では、私立・国立学校のカリキュラム構成及び年次によってコマ数が少し変わるけれども、平均で週4・5時間ラテン語を学習し、理科系高等学校（Liceo Scientifico）、社会・心理・教育高等学校（Liceo Socio-Psico-Pedagogico）および外国語高等学校（Liceo Linguistico）では、週3～4時間を費やしている。³

また、マス・メディアや広告の影響も決して見過ごすことができない。というのは、ラテン語を知らない人ですら、書かれたものや耳から聞こえるものを自然に吸収してしまう傾向があるからである。例として、ローマ市民大学（Università Popolare di Roma）が発行した2005-06年のコースのパンフレットを見てみよう。[図1]

La più segnalata da il Trovacorsi

UNIVERSITÀ POPOLARE di ROMA

2005-06

Tutti gli indirizzi e i telefoni dell'Upter
Sport, benessere e fitness
Lingua inglese per bambini
nei fine settimana e nei Campus estivi

CORSI SPECIALI
Per badanti Imprenditorialità femminile
Educazione degli adulti Autobiografia Ricamo
Per cameriere di ristorante Cucina per badanti
Degno di note a Santa Cecilia
Visite guidate e viaggi culturali
I Campus di Lecce e Fabriano
Tanti libri EDUP in offerta
I programmi di Santa Marinella

Primum vivere deinde philosophare.

FEDERAZIONE ITALIANA
up.cr
PER L'EDUCAZIONE CONTINUA

www.upter.it

Quo vadis?
Upter, cultura di base per tutti.
3000 corsi per un orientamento sicuro.



**Mens sana
in corpore sano.**
Upter, cultura di base per tutti.
3000 corsi per il tuo benessere.



**Ignorantia
legis non excusat.**
Upter, cultura di base per tutti.
3000 corsi, anche per i più ostinati.



Upter forma mentis.
Upter, cultura di base per tutti.
3000 corsi per l'evoluzione della specie.



Upter modus vivendi.
Upter, cultura di base per tutti.
3000 corsi che allungano la vita.



**Melius abundare
quam deficere.**
Upter, cultura di base per tutti.
3000 corsi per farti crescere. Bene.



Via del Corso, 101 • Roma • Tel. 066920431 • www.upter.it

[図 1]

著名な言語学者であり、クルスカ学会 (Accademia della Crusca) の会長でもあったトリスターノ・ボレリ (Tristano Bolelli, 1913-2001) は、あるインタビューで次のように明言している。

《ラテン語に関するかぎり、例外を除いて、
ラテン語をほんの少ししか知らない人や全く
知らない人たちによる引用がみられる。
古代ローマの言語 [ラテン語] のなかで引用を
ひけらかす本物のラテン言語学者を見つける
のは、むずかしい。
たとえば *curricola* などは、まあよい。
しかし *sponsors* などともいうだろうか?
Juniorum Juventutis [サッカーチーム] の
sponsors の中に、 電話会社がある
のか!?! 》⁴

時として見られるラテン語の不適切な使い方に対するボレリ教授のコメントは、平均的なイタリア人市民がラ

テン語やラテン語の表現を日常的に借用している観点からみても、啓蒙的である。

このような傾向は、次のような徴候からもさらに確認できる：

1. 論文・小論文作成指導において大学教官が学生に配布する規定
2. イタリアの定期刊行物や新聞に記事、手紙、コメントを送る際の手引き・ガイド

これらの手引書では、《ラテン語の語句や表現を乱用しないように》、そしていずれにしても、《正しいものを活用する》ように促している。頻繁に使われるラテン語の言い回しの例のなかには、次のような例がある：*brevi manu, Deo gratias, status quo, vox populi, una tantum, ad maiora, dulcis in fundo, currenti calamo, deus ex machina, cum grano salis, lupus in fabula, conditio sine qua non*, 等。⁵

学校・宗教教育、あるいはマス・メディアによる無意識的、若しくは意識的な受容によって、事実、ラテン語は、書き言葉において確固たる存在であり、話し言葉においては、老いも若きも、決して少なくはないイタリア人によって、まるで格言や指令のように、偉そうな口をきくためにもよく使われている。

現代イタリア語にかなりの頻度で見られる様々なラテン語の言葉や言い回し、慣用句、格言などを検討した研究・出版物は数多くある。⁶

本論文では、おそらくこれまであまり取り上げられなかったある特殊な観点から問題を分析することを選んだ。つまり、外国人へのイタリア語教育という視点である。⁷ ラテン語学習の基盤を持たないであろう第二言語または外国語としてイタリア語を勉強する学生に対して、ラテン語の借用語の問題をどのようにして提示するのか？

本著者は、イタリアの現代社会現象をテーマにしたある授業で、「スローフード運動・スローシティー運動」に関する新聞記事を読解していた際、記事に引用されていたラテン語での格言（*festina lente* ゆっくり急げ）の語学教育上の“扱い”という問題に気づいた。その時にイタリア語の訳語を示すことがより簡単で理にかなった解決方法だと思い、言葉がもつ<意味>だけ理解してもらおうような方法を選んだ。しかしながら、その後、よく検討した結果、第二言語または外国語としてイタリア語を教える教師は、外国人学生へイタリア語を教える課程で使用する教材（*testi autentici*、即ち外国語としてイタリア語を学習する者に適用された教材ではなく、イタリア人を対象にしたイタリア語での素材、抜粋）に表れる様々な言語的要素を、うまく使いこなす努力をしなくてはならないという結論に辿り着いた。そうすることにより、生徒に常に新しい文化的刺激を与えることができる。

語学教育における文化的な内容の意義、学生がもつ語学学習への意欲に対するその影響の問題は、近年、外国語教育の専門家によるさらなる研究の対象になりつつある。⁸

現代イタリア語に存在するラテン語の要素をどのように外国人学生に提示するかという問題は、帰納法に基づいて、また時には遊び感覚で、様々な課題を行うことで取り組むことができるだろう。

ここで、次のように、ラテン語からのさまざまなタイプの借用語を含んだイタリア語の文章をいくつか例にあげてみよう。イタリアの代表的な新聞からの記事である。もしかすると、このような例は、分野別によるイタリア語（社会のイタリア語、政治におけるイタリア語、映画のイタリア語等）という中上級コースのカリキュラムに含ま

れるかもしれない。このようなケースは、ラテン語の借用語というテーマについて文化的に深く掘り下げる最高のきっかけをつくってくれるであろう。

それぞれの文章は、話し言葉と書き言葉のイタリア語において、より頻繁に見られるラテン語の借用語の主な三つの分類を例示している。

1. イタリア語に普及している前置詞をもつラテン語構文
2. 有名な語句
3. ラテン語の言葉

1. イタリア語に使われている前置詞をもつラテン語構文例

イタリアの新聞に掲載された記事の中に現れる前置詞をもつラテン語構文例を見てみよう。

[...] *La questione di fondo, la madre di tutte le battaglie, è se un embrione che sarà vita umana lo è già come embrione. Che sia vita nessuno lo contesta; ma «umana»?*

Il cardinale Scola la mette così: «Io sono Angelo Scola, 63 anni, Patriarca di Venezia perché sono stato quell'embrione». Ho già lamentato che la Chiesa non si ricordi più dell'anima (dell'anima infusa da Dio). Ma ora scopro che il nostro bravo Cardinale si dimentica del libero arbitrio. E senza libero arbitrio non c'è colpa né merito: tutto è già predeterminato ab ovo. Per vincere un referendum la Chiesa sta massacrando tutta la sua teologia? 9

“E senza libero arbitrio non c'è colpa né merito: tutto è già predeterminato ab ovo” (訳: [キリスト教の思想によれば、神が世界を創造した際、人間に与えた] 自由意志がなければ、罪も報いもなく、全ては最初からあらかじめ決定されている)

たとえ、ラテン語の表現である *ab ovo* を知らないまま、この文の意味を生徒が理解したとしても、第二言語・外国語としてのイタリア語教師は、授業の終わりのほうで、このラテン語の存在を次の二つの目的に利用できるだろう。

その1. 記事のテーマの難解さにうんざりしたクラスの雰囲気と和ませる。その2. イタリア文明の基盤であるローマ古典文明に関して興味深い文化的観点を紹介する。

したがって、教師は、文章の読解練習をし、“人間の胚に関わる科学研究・実験とカトリック教の思想”という複雑な課題について必要な説明を加えてから、このラテン語の言葉の詳細を理解させるために次のような練習問題を提示できる。

練習問題 例1

Istruzioni (指示内容):

Leggi le seguenti frasi e scegli la risposta corretta tra A, B e C. (以下の文章を読んで、A, B, C

の中から正解だと思っているものを選びなさい)

1. L'espressione "ab ovo" che compare nel testo secondo te è di origine:

A inglese B francese C latina

2. Secondo te cosa significa?

A dall'uva B dall'uovo C dall'ovino

3. Scegli il sinonimo tra le seguenti espressioni:

A dall'origine B dalla fine C dalla cosa più piccola

(訳:

1. 文の中に出てくる "ab ovo" という表現の語源は何語だと思いますか:

A 英語 B フランス語 C ラテン語

2. 意味は何だと思いますか:

A ぶどうから B たまごから C 羊から

3. 次の三つの表現の中から同じ意味の言葉をひとつ選びなさい。

A 始まりから B 終わりから C より小さいことから

"ab ovo" の意味を学生達に帰納的に理解させたあと、教師はこの言葉の歴史的語源を、できれば学生の母語(或いは中間言語、lingua ponte)を使用して説明する。

Ab ovo ... (usque ad mala) 文字通りにいうと、《たまごから(りんごまで)》

現代イタリア語では、次のような言葉の同義語として使われている: "元来の"、"初めから"、ある出来事の "発端" にさかのぼるという意味での "始まり"。ローマ時代の詩人ホラティウス (Horatius) は、彼の作品 *Satire* (1, 3, 6) の中で、*ab ovo usque ad mala* (たまごからりんごまで、つまりは、前菜から果物まで、そしてより広い意味では、初めから終わりまで) という表現を使い、昼食を卵と、決して欠かしてはならないアスコリ産のオリーブで始め、りんごで終わるというローマ人の古いしきたり・慣習を指している。最初に前菜、最後に果物という古いしきたりは、今日まで変わらずにイタリア料理のなかで守り続けられている。実際、イタリア料理のメニューには、通常、前菜、プリモ、セコンド(メイン)、コントルノ(付け合せ)、ドルチェ(デザート)、フルーツ(そしてコーヒー)が含まれる。

一般的に、*ab ovo* という表現は、だれかが、たとえば紀元前、アダムとイブまでさかのぼるくらい大昔の話を語り始めるとき引用されるのが常である。

“ab ovo”の意味と使い方に関する文化的視点を説明した後、他の例をあげたり、もし必要であれば、それぞれのレベルに応じて、生徒達自身に簡単な文章をいくつか考えるよう促すこともできるであろう。最後に、イタリア語で使用されている前置詞を伴うラテン語の主要構文、意味、歴史的語源、現代イタリア語におけるそれらの使用例などをまとめたリストと一緒に、家で読むためのプリントを配布する。例：*ab initio, ab imis (fundamentis), ad hoc, ad libitum, ad interim, ad personam, ante litteram, de facto, ex abrupto, ex aequo, ex cathedra, ex novo, ex post, ex tempora, in extremis, in itinere, in media res, in nuce, inter nos, pro capite ...*

2 . 有名な語句

あるイタリアの新聞記事に掲載されていた次の抜粋を読んでみよう。

[...] Silvio Berlusconi, che “non si sente tenuto ai miracoli”, sta pensando a una proposta stralcio, un testo che permetta di trovare un accordo sulla nuova Costituzione europea lasciando fuori il punto più controverso: quel sistema di voto con doppia maggioranza su cui l'accordo, appunto, sembra impossibile. [...] Andando via con Gianfranco Fini, dopo l'ultimo confessionale con il lussemburghese Jean-Claude Juncker, il premier italiano è parso pessimista e ha parlato di “difficoltà”. Poi ha ripetuto (in latino) il concetto già espresso ieri e che è diventato un po' il leit motiv di questo vertice: “ad impossibilia nemo tenetur”. E Fini, sempre latineggiando, gli ha fatto eco con una nota di speranza: “Ad astra per aspera”[...].¹⁰

イタリア人、とくに政治家達が、演説の調子を高め、彼らのコメントに大きな信頼性と権威を付け加えるために、いかに頻繁にラテン語の引用に頼っているかを示す良い例である。

授業の前半にまず、教師は、この記事の難解なテーマである《欧州憲法とイタリアの役割》を理解させるために読解練習などの課題を提示する。次に、この堅苦しいテーマから少し離れてクラスの雰囲気リラックスさせるため、記事に出てくる “ad impossibilia nemo tenetur” と “ad astra per aspera” という二つの表現から、ラテン語の引用 という本題に入る。

学生が意味を理解できるように、そしてイタリア語におけるその他の有名な語句を知ってもらうために、次のような練習問題を提示できる。その前に、当然ながら、ラテン語の表現は、現在ではイタリア人の会話に普通に取り入れられていることを説明し、必要な指示を与える。いくつかのラテン語表現のケースでは、大体の人がその（表現の）後に続く言葉を知っているので、その表現の最初の部分だけ引用することが多いということもはっきり説明しておいた方が良いでしょう。

練習問題 例2 11

Istruzioni (指示内容):

Cercate di comprendere il significato di queste battute dal mini contesto in cui si trovano. Se non ci riuscite, cercatelo fra quelli dati più sotto, alla rinfusa. (訳: 次に見られる短いせりふのやりとりの意味を理解するように努めてください。もしわからなければ、順番はでたらめですが、下に書かれているヒントから、探してみてください)

1. A. Perché hai interrotto la dieta? (訳: なぜダイエットを途中で止めたの?)
B. Ad impossibilia nemo tenetur.
2. A. Sto attraversando un periodo carico di lavoro... (訳: 今、仕事で手がいっぱい状況なの・・・)
B. Ad astra per aspera!
3. A. Quelli staranno ridendo di te. Perché non fai qualcosa? (訳: あの人たち、たぶんあなたのことを笑っているでしょう。あなた、なぜ何もしないの?)
B. Risus abundat (in ore stultorum).
4. A. Stanno per arrivare i tuoi due tremendi nipotini... (訳: あなたのあのとんでもない甥っ子たち2人もうすぐ着くわね・・・)
B. Libera nos, Domine, (a malo)!
5. A. Gli piace il gelato al cetriolo. (訳: 彼はきゅうりのジェラートが好き)
B. De gustibus (non est disputandum).
6. A. Ho sentito che cambierai lavoro. (訳: あなたが転職することにしたって聞いたわ)
B. Alea iacta est.
7. A. Finalmente mi sono comprato il cellulare. (訳: ついに私も携帯電話を買ったよ)
B. Tu quoque (Brute, fili mi)!
8. A. Dovresti smettere di mangiare così tanti dolci. (訳: 甘いものをたくさん食べるのはやめたほうがいいですね)
B. Medice, cura te ipsum!

Ad impossibilia nemo tenetur 文字通りの意味は、《できないことをする義務は誰にもない》すなわち、“あることを行うことが不可能な状況にもかかわらず、その実行を求め、長くその仕事にしばりつける法規はない”という、ローマ法の時代に生まれたこのラテン語の決まり文句は、民間法の規律として法律上の隠語となり、義務が課される対象や目的はかならず可能なことでなければいけないものであった。一般的には、何か大きな力が原因で、引き受けた仕事を成し遂げることができなかつたことを正当化するために使われる表現である。

Ad astra per aspera 文字通りの意味は：《困難を乗り越えて星へ》、そして隠喩法だと、“成功は苦労（努力）によってのみ得られる”（Seneca, *Hercules furens*, atto II, v. 437）。セネカの作品から引用されたこの句は、そんなに簡単に成功にたどり着くことはできない、成功に続く道は障害に満ちている、ということを強調するために使われる。これはおそらく、英雄達 とりわけ、ヘラクレス は亡くなるとオリンポスの神々の山に運ばれたというギリシャ神話に起源をもつ。英雄であることは、まさに多くの困難な偉業を成し遂げたことを示唆している。野心的な目標はつねに犠牲を伴い、難しい事業であればあるほど、それを楽々とやり遂げたとき満足感は大くなるものである。同じ概念を表す決まり文句がもうひとつある、それは、*Ad augusta per angusta* である（困難を乗り越えて最高なものに到達する）。

授業は、自宅で読んでくるプリントを配布し、イタリア人がよく引用する有名なラテン語の語句のリストを渡し、終了される。各語句にはイタリア語の訳、歴史的語源の簡単な説明（必要に応じて、学生達の母語、もしくはリングア・フランカ（英語）で書かれたもの）、そしてイタリア語会話での使用例が附いている。

例として：*Absit iniuria verbis/ Amicus certus in re incerta cernitur/ Carpe diem (quam minimum credula postero)/ Dura lex, sed lex/ Errare humanum est, perseverare autem diabolicum/ Excusatio non petita, accusatio manifesta/ Facta non verba!/ Vasa inania multum strepunt/ Fortuna iuvat audaces/ In dubiis abstine/ Ignorantia legis non excusat/ In medio stat virtus/ Melius est abundare, quam deficere/ Memento audere semper/ Mens sana, in corpore sano/ Semel in anno, licet insanire/ Veni, vidi, vici/ Vox populi, vox dei* 等

3 . ラテン語の言葉

ここでは、イタリア語の文中に挿入されたラテン語の言葉の例をいくつかあげる。 ¹²

1. Nel televisore c'è il bottone del *video* e dell'*audio*.
(訳： テレビには、 *video* と *audio* のスイッチがあります)
2. Dal benzinaio acquistiamo la *super*.
(訳： ガソリン・スタンドで *super* [高性能ガソリン]を買う)
3. In tribunale siede il giudice *a latere*.

(訳： 法廷には“*a latere*” [陪席] 判事がいる)

4. L'assicurazione prevede il *bonus* e il *malus*.

(訳： 保険は、“bonus – malus” [自動車保険の無事故による年次の割戻し金 事故の回数により金額が変わる] の規定がある。

5. I contratti sono *validi erga omnes*.

(訳： 契約は、“*erga omnes*” [例外なしにどの人に対しても] 有効である)

6. Il governo ci fa pagare l'*una tantum*.

(訳： 政府は、私達に *una tantum* [特別税] を払わせる)

7. L'imputato si procura l'*alibi*.

(訳： 被疑者は *alibi* [アリバイ] を手に入れる)

8. Il Presidente del Consiglio assume l'*interim* di un ministero.

(訳： 総理大臣はある省庁の大臣職が空席になった場合、その臨時代理を務める)

9. Il governo teme che si aggraverà ulteriormente il *deficit*.

(訳： 政府は *deficit* [赤字] がさらに悪化するのではないかと懸念する)

10. A teatro si chiede il *bis*.

(訳： 劇場では *bis* [アンコール] を求める)

11. La squadra di calcio cerca uno *sponsor*.

(訳： サッカー・チームは *sponsor* [スポンサー] を探す)

12. Il candidato alle elezioni sogna di raggiungere il *quorum*.

(訳： 選挙候補者は *quorum* [定足数] に達することを夢見る)

事実、ラテン語は我々の日常会話の中で生きている言語であり、第二言語・外国語としてのイタリア語教師が、現代イタリア語に見られるラテン語の表現や言葉の語源・由来を、文字通りの翻訳だけでなく、しかるべき説明を与えるのは適切であると思われる。一方で、ラテン語文法の細かい説明のためにしょっちゅう授業が止まってしまうのはあまり望ましくない。以下のことを学生達に知らせれば十分だと思われる：

- ・ラテン語の動詞から派生しているイタリア語がある (*deficit*, *facsimile*, *lavabo*, *salve*, *vademecum*, *veto* など)
- ・ラテン語の名詞から派生している言葉もある (*album/albo*, *casus belli*, *curriculum vitae*, *excursus*, *gratis*, *rebus*, *vice*, *viceversa* など)
- ・ラテン語の形容詞・代名詞から派生している言葉 (*alter ego*, *eccetera*, *junior/senior* など)
- ・ラテン語の副詞から派生している言葉 (*alias*, *alibi*, *extra* など) ¹³

イタリア語の語彙の語源解説は、単語の本来 (ラテン語) の意義と現在の意義との比較を中心にして行うとよいだろう。

最終的に教師が生徒に気づいてほしい重要な鍵となる概念は、イタリア人の大多数がラテン語と認識せずにそれを使っているということであり、それが、イタリア語とラテン語という2つの言語間にある緊密な結びつきが示す明らかな要素でもある。

イタリア語講師は、このようなアクティビティの受け入れられ方の様子を見て、学生たちがラテン語について更なる関心を表わした場合、カリキュラムと時間が許すかぎり、このテーマをもう少し深めてもよいと思われる。

この課題を別の観点からも分析することができる。例えば、中級クラスなら、2・3回の授業に渡って、一回あたり2・3分ずつという気楽なペースで、上級クラスなら1・2回で、《現代イタリアにおけるラテン語ブーム》というテーマを取り上げているビデオを見せ、以下の聴解練習を実施することができる。ビデオのダイアログのテキスト(文書)¹⁴を使用して、また別のヒアリングの練習としてブランク埋め込練習も実施可能である。ブランク埋め込練習は語学学習の様々な目的に適應するので授業の教育内容やクラスのニーズに合わせて構成すればよいだろう。

例のビデオは最近、イタリア国营放送局である Rai Uno にて、「Uno mattina」という番組の中で紹介された内容である。¹⁵

指示内容は、以下のようになる。

Segna con una crocetta solo le affermazioni VERE (正しいと思う文章に✓を付けなさい)

1. C'è un grande interesse per lo studio del latino in Italia.
2. Studiare il latino aiuta a mantenere allenata la vista.
3. Il primo invitato è un chirurgo.
4. Il secondo invitato è uno studente universitario.
5. Il giovane si chiama Giuseppe.
6. Il giovane fa un notiziario radiofonico in latino.
7. La radio che trasmette in latino ha sede a Palermo.
8. "Fax" in latino significa "rendi simile".
9. Il giovane racconta che quando ha iniziato a studiare il latino prendeva brutti voti.
10. Dice anche che ha cominciato ad amare il latino grazie a un nuovo testo scolastico scritto da un professore danese.
11. Racconta che nella sua città c'è un circolo di latinisti che si riunisce due volte alla settimana.
12. L'idea della radio in latino è nata in Finlandia.
13. "Tele" è un suffisso derivato dal greco antico e significa "vicino".

(訳)

- 1 イタリアでは現在ラテン語に対する注目が高まっている。
- 2 ラテン語を勉強すると視力のコンディションを保つことができる。
- 3 最初に紹介されたゲストは外科医である。
- 4 もう一人のゲストは大学生である。
- 5 若者の名前は「ジュゼッペ」である。
- 6 若者はラテン語でのラジオニュースを担当している。
- 7 ラテン語で放送するラジオ局の本部はパレルモにある。
- 8 ファックスは、ラテン語で「似たものにしなさい」という意味をもつ。
- 9 若者はラテン語を勉強し始めた頃、成績が悪かったと言う。
- 10 彼はラテン語が好きになったのはデンマーク人の教授が書いたラテン語の教科書のおかげだと言う。
- 11 彼は、故郷の町にラテン語学者のサークルがあり、メンバーが週二回集まると言う。
- 12 ラテン語で放送するラジオ局の発想は、最初フィンランドで生まれた。
- 13 「テレ」は古代ギリシャ語から由来する接頭辞であり、「近い」という意味をもつ。

このビデオを鑑賞することで学生に理解してもらえるのは以下のことである。

- A) 近頃、イタリア人のマネジャー及びキャリア・ウーマンたちの中でラテン語学習への人気生まれ、現在のイタリアではラテン語の「ブーム」のような現象が起こっている。
- B) このブームの基に《ラテン語は頭の働き、記憶力を鍛え、*forma mentis*を作る》と言う信念がある。
- C) 新メソッドを使用したラテン語教科書及び熱心なラテン語教育者の活動のおかげで、ラテン語サークル及びラテン語でのラジオニュースができるほど、ラテン語を高く評価する若者のファンもいる。

実際、文書だけではなく、このようなAV教材も、現代イタリアの語学的な面と文化的な面を分析する最高のきっかけになる。ビデオを利用して、イタリア語力を養成しながらイタリアの現代社会の一つの現象であるラテン語の存在とその評価のことを学生に知ってもらうことができる。

おわりに

結論として、イタリア語と言語学的・語源的そして文化的に関連する問題に特に敏感な第二言語または外国語としてのイタリア語教師は、授業に使用する教材にラテン語の慣用句・言い回し、言葉・引用が現れた場合、できれば生徒たちにラテン語・ラテン文化とイタリア語・イタリア文化との強い絆を理解してもらうように、授業の文化的な内容を重視し、刺激になる教育的なアプローチを採用する努力を怠ってはならないだろう。

イタリア語の基になっているラテン語の重要性と意義、イタリア文化の起源である古典ラテン文明の重要性と意義を、生徒がより意識するように導く教員のアプローチは、もちろん、文化相対理解と異文化性のコンセプトを配慮したものでなければいけない。¹⁶

現代イタリア語を分析するためには、二つの視点が考えられる。一つは、共時的側面で、現在実際に使われているイタリア語の学習につながり、もう一方は通時的側面で、ラテン語の起源と、歴史的な深さに関与している。このため、常に指導者でありながら「facilitatore」（ファチリタトーレ＝語学学習が容易になるような工夫を考え、学生に助けを提供する役割を担う人）¹⁷ でもある教師は、生徒の興味とモチベーションを刺激するため、語学教育上より適切と言える、帰納的教授法に基づきながらも、出来るなら遊び感覚を取り入れた課題を選ぶべきだと思われる。

事実、イタリア語教師が果たすべき、学習者が言語を学び、文化を理解するために必要な事項の解説者としての役割は、複数の文化を比較する能力を有する“文化の媒介者”（mediatore culturale）¹⁸ としての役割でもあり、イタリアが属するヨーロッパから、言語、歴史、文化の点で全く背景を異にする国で活動するイタリア語教師の場合（ネイティブ教師も地元の教師も）、学習者がイタリア語・イタリア文化を理解するためには、特に重要な役目だと考えられる。言い換えれば、学習者がもつ語学学習への意欲及び異文化への関心と理解度は、教師がもつこの“文化の媒介者”としての感性によっても決まると思われる。

本論文の日本語をご丁寧にチェックしてくださった早稲田大学文学学術院教授、宮城徳也先生に心からお礼を申し上げます。

¹ イタリア語とその方言に見られるラテン語の歴史的な変化をより詳しく知るには、多くの参考文献の中で特にわかりやすいこの2冊の本を参照：Gian Luigi Beccaria 著の *Italiano. Antico e nuovo*, Milano, Garzanti, 1988 及び同著者の *Sicut erat. Il latino di chi non lo sa: Bibbia e liturgia nell'italiano e nei dialetti*, Milano, Garzanti, 1999-2002 年。

² イタリアの文部省による 2005/06 年度の高等学校在学学生数のデータである。

³ このデータは本論文の執筆者が 2007 年 5 月から 6 月にかけて行った調査の結果である。調査の範囲はブレシア（BRESCIA）市（イタリア、ロンバルディア州）所在の国立・私立高等学校におけるラテン語カリキュラムであり、本データはラテン語のコマ数の平均数値に当たる。

⁴ “Quanto al latino, si sa che l'uso di citazioni è fatto, salvo eccezioni, da uomini che il latino lo sanno poco o non lo sanno affatto. È difficile trovare un latinista vero che ostenti citazioni nella lingua di Roma. Diciamo curricola, e va bene. Ma poi diciamo anche sponsors? Tra gli sponsors della squadra juniorum Juventus c'è la tal Società di telefonia ???”.

（Paolo Cappelli, “Morbus Anglicus”, in *Cultura IMD*, n.5, 2005, Roma, p. 55 から引用）

⁵ 大学生への手引きに関しては、例として、パルマ大学のジョバンニ・ジャヴェッリ(Giovanni Giavelli)教授編纂によるマニユアル、*Suggerimenti per la redazione di bozze, relazioni, tesi di laurea* を参照。

（ウェブサイト：<http://digilander.libero.it/giavelli/DIDATTICA/sintassi.html> で、2008 年 1 月現在閲覧可能）

イタリアの新聞の手引きの参考例は、*Sole 24 ore* 新聞が出している次のサイトで見られる。

https://www.odg.mi.it/dispense_view.asp?DID=4 （2008 年 1 月現在閲覧可能）

⁶ 主題に関連した主要な作品のタイトルを以下に掲載する。出版日の新しいものから古い順にリストアップした。この論文で分析されたラテン語表現の説明に関しては、本著者が、Cesare Marchi, *Siamo tutti latinisti. Tutte le parole che usiamo senza saperlo*, Rizzoli, Collana BUR, Milano, 2000 に言及している。

-
- *Angela Maria Zanoner, *Ipse dixit: frasi latine*, Milano, DVE Italia, 2003.
- *Renzo Tosi, *Il fiore delle sentenze latine e greche*, Milano, BUR (Superbur Classici, 135), 2001.
- *Cesare Marchi, *Siamo tutti latinisti. Tutte le parole che usiamo senza saperlo*, Rizzoli, Collana BUR, Milano, 2000 (prima edizione: 1983)
- *Angela Maria Zanoner, *Fraasi latine: chi le ha dette, cosa significano, come usarle: massime proverbi, sentenze per conversazioni, discorsi, articoli ecc.*, Milano, G. De Vecchi editore, 1999.
- *Silvia Battistelli, *Il nostro latino quotidiano: l'attualità del latino nelle parole di uso comune e d'autore*, Milano, La Spiga-Meravigli, 1994.
- **Il libro delle citazioni latine e greche*, a cura di Paola Mastellarò, Milano, A. Mondadori (Oscar varia, 1349), 1994.
- *Giuseppe Aureliano, *La nostra tradizione culturale nelle espressioni latine*, Gorle, Litostampa Istituto Grafico, 1992.
- *Marzio Servio, *Cum grano salis: il latino per l'uomo di mondo*, Milano, A. Vallardi (Domino, 3), 1992.
- *Paola Mastellarò, *Dizionario di citazioni latine e greche*, Milano, Mariotti (Dizionari Mariotti), 1992.
- *Gerhard Fink, *Ditelo in latino*, Milano, Longanesi (Il cammeo, 223), 1992.
- *Luigi De Mauri, *5000 proverbi e motti latini: flores sententiarum: raccolta di sentenze, proverbi e motti latini di uso quotidiano, in ordine per materie, con le fonti indicate, chiarimenti e la traduzione italiana*, II edizione riveduta e corretta da Angelo Paredi e Gabriele Nepi, Milano, U. Hoepli, 1990.
- *Gian Luigi Beccaria. *Italiano. Antico e nuovo*, Milano, Garzanti, 1988.
- *Giuseppe Fumagalli, *L'ape latina: dizionarietto di 2948 sentenze, proverbi, motti, divise, frasi e locuzioni latine, ecc. / raccolte, tradotte e annotate da Giuseppe Fumagalli*, II edizione corretta e accresciuta, Milano, Hoepli (Manuali Hoepli), 1987.
- *Michele Gagliardo, *Dizionario delle voci latine ricorrenti nell'uso dell'italiano*, Firenze, Sansoni (Dizionari pratici), 1985.
- *Raffaele Giomini, Pasquale Così, *Bonus Malus: il latino degli italiani*, Roma, Dante Alighieri, 1981.
- ⁷ 外国語としてのイタリア語の教科書である Giovanna Stefancich 著 *Cose d'Italia, tra lingua e cultura* (Roma, Bonacci editore, 1998) の中に (pp. 50-51) ラテン語での言い回しを扱う練習問題が二つ記されていて、その練習問題以外、本論文が取り上げる課題に直接関連した参考文献はないように思われる。
- ⁸ 語学教育における文化的な内容の意義、その重要性について、P. Diadori 編集、*Insegnare italiano a Stranieri*, Firenze, Le Monnier, 2001, pp. 32-43; C. Lavinio 編集、*Lingua e cultura nell'insegnamento linguistico*, Firenze, La Nuova Italia, 1992, pp. 11-38; F. Quartapelle 編集、*Insegnare la lingua straniera*, Firenze, La nuova Italia, 1992, pp. 149-163; A. Becchetti 等編集、*La dimensione culturale nell'insegnamento di L2*, Milano, Edizioni Scolastiche Bruno Mondadori, 1986, pp. 67-76 を参照。
- ⁹ 2005年6月11日付の *Corriere della sera* 新聞11ページに掲載された Giovanni Sartori による記事、"L'embrione, la persona e la ricerca scientifica" から。
- ¹⁰ 2003年12月13日付の *La Repubblica* 新聞4ページに掲載記事、"Carta Ue, la proposta italiana: stralciare la doppia maggioranza" (筆者の明記なし) から。

11 この練習問題の構成は Giovanna Stefancich 著 *Cose d'Italia, tra lingua e cultura*, Roma, Bonacci editore, 1998) の pp. 50-51 に掲載されている練習問題から発想を得た。本論文の読者に練習問題及び例文の意味が理解できるよう、イタリア語に和訳を付けたが、学習者に提供する際、訳は付けない。

12 この例文は Cesare Marchi 氏が *Siamo tutti latinisti...cit.*にて、現代イタリア語において頻度が高いラテン語言葉として挙げている例である。

13 ラテン語の語彙に関する(イタリア語による)参考文献は、以下の資料を参考にできるだろう。

*Luigi Castiglioni, Scevola Mariotti, *IL – Vocabolario di latino di L. Castiglioni e S. Mariotti*, ed. Loescher, Torino, 2006.

*Angelo Diotti, *Lexis – Lezioni di lingua latina*, ed. Bruno Mondadori, Milano, 1998.

*Nicola Flocchini, Paolo Guidotti Bacci, Michele Moscio, *Comprendere e tradurre. Grammatica di lingua latina*, ed. Bompiani, Milano, 1998.

*Cesare Marchi, *Siamo tutti latinisti. Tutte le parole latine che usiamo senza saperlo*, ed. Rizzoli, Milano, 2000.

*Nicola Marini, "Lo studio del lessico latino di età classica", in *Nuova secondaria*, n. 3, 2003, pp. 72-76.

*Francesco Piazzì, *Lessico essenziale di latino*, ed. Cappelli, Bologna, 1999.

*Nicola Zingarelli, *Lo Zingarelli 2007- Vocabolario della lingua italiana di Nicola Zingarelli*, ed. Zanichelli, Bologna, 2006.

14 ビデオのダイアログ内容は付録を参照。

15 2007年6月7日に Rai uno チャンネルに放送されたものである。

16 外国語としてのイタリア語教育における文化相対理解と異文化性の重要性に関して、L. Vignozzi, "L'insegnante di L2 come mediatore culturale", in *Ilsa - Italiano a Stranieri*, n. 4, Roma-Atene, Edilingua, 2006 を参照。

17 イタリア語講師を果たすべき"facilitatore"の役割について、P. Diadori 編集 *Insegnare italiano ..., cit.*, pp. 44-45 を参照。

18 "mediatore culturale"のコンセプトに関して、L. Vignozzi, *cit.*, p. 17 を参照。

付 録

STUDIARE LATINO FA BENE ALLA MENTE (ラテン語の学習は知能に良い)

Dal programma televisivo "Uno mattina", Rai uno, 7 giugno 2007. (RAI UNOイタリア放送局にて 2007年6月7日放送「UNO MATTINA」番組より)

Durata: 5-6 minuti (持続時間: 5・6分)

CONDUTTRICE: E adesso, spettatori e spettatrici, parleremo della lingua latina dei nostri avi. [Frase detta in latino e poi in italiano]

Allora, pare che ci sia un grande, rinnovato interesse per questa lingua che fino a poco tempo fa veniva considerata morta, era caduta nel più totale disinteresse. Ora le cose sono cambiate: uomini e donne in carriera la studiano per tenere in allenamento la mente. Allora vediamo di capire cosa sta succedendo con il dottor *Ciro Vestita* che è un nutrizionista, ma anche un grande appassionato di lingua latina.

DOTTOR VESTITA: Mi piace la lingua latina, tanto, sì.

CONDUTTRICE: E adesso ci dirà il perché. E poi presentiamo anche *Giuseppe Marcellino* che, pensate, è uno studente universitario e conduce un notiziario in latino su radio *Zavù*, una radio catanese, universitaria, di Catania. Benvenuto.

Perciò i tuoi colleghi, eh, chi ti ascolta sente parlare in latino un po' come ho fatto io all'inizio...

Allora dottor *Vestita*, anche *Lei* è un appassionato di latino. Come se lo spiega questo rinnovato interesse per questa lingua?

DOTTOR VESTITA: Io credo che per parlare bene l'italiano bisogna conoscere un po' di latino. Tante volte si sente, tanta gente, anche colta, il doppio dativo: "a me mi sembra, a me mi pare"...

Bene in latino, "mi sembra" si dice "mi videtur" però nessuno si sognerebbe di mettere due volte il "mi" e quindi si dice "a me sembra", "a me pare", non il doppio dativo. E quindi questo, a mio avviso, è già una piccola cosa. E poi nella lingua comune abbiamo tantissime parole che derivano dal latino che poi ritroviamo anche in inglese, in tedesco; "strada", ad esempio, che è "via latidibus strata" in latino, diventa "street" in inglese e "strasse" in tedesco. I romani sono andati ovunque e hanno imposto la loro presenza, hanno imposto la loro lingua. E questa è una cosa bellissima.

CONDUTTRICE: È una lingua che tutti abbiamo studiato sui banchi di scuola. C'è chi l'ha amata e c'è chi l'ha odiata. Abbiamo qui una bella lavagna, proprio per tornare ai tempi della scuola. Che esempi ci può fare?

DOTTOR VESTITA: Mah, semplicissimi. La gente, i ragazzi soprattutto credono che questi siano tutti termini inglesi. Non è assolutamente vero. "Internet", ad esempio deriva da "inter" che vuol

dire "fra" e "net" che deriva da "necto-nectis", che vuol dire connettersi, connettersi fra varie persone, tra vari computer, in questo caso. "Computer", deriva da "computo-computis" un verbo latino che significa "fare calcoli".

"Autobus", "the bus" in inglese: la gente crede che sia un termine inglese ma non è così perché è un termine che deriva da "omnibus" che è il dativo di "omnis" . Quando fu inventato questo furgone immenso, questo autobus, dissero che era "per tutti" e quindi essendo per tutti, c'era il termine latino "omnibus". Da cui è derivata la parola "autobus", e in questo caso "bus" in inglese.

"Fax": tante volte la gente crede che sia un termine inglese ma non è così; "fax" vuol dire "fac simile", cioè "rendi simile".

La "dieta", che cos'è la dieta? Deriva da "dies diei", che vuol dire "giorno". E lo ritroviamo in inglese "diet" e anche in tedesco "diet" e vuol dire "comportamento giornaliero".

"Strada", "via latidibus strata", cioè una strada stratificata con pietre. I romani le strade le sapevano fare bene. A Roma le strade erano perfette, al tempo di Cesare. C'era questo manto iniziale e poi le pietre messe in maniera perfetta e la sabbia sopra. Ed erano "viae latidibus stratae" perché c'erano diverse strade in pietra che non sono come i san Pietrini di adesso, che sono tutti sconnessi. È una lingua meravigliosa e dovrebbero a mio avviso studiarla un po' tutti anche per un allenamento mentale: in latino ci sono le declinazioni che noi ritroviamo in tedesco e quindi i manager probabilmente devono attingere a questa "forma mentis" per stare un pochino più in forma.

CONDUTTRICE: Allora, Giuseppe è uno studente universitario che sembra parli il latino come l'italiano. Spiega a tutti gli studenti che magari invece ci combattono con questa lingua.

Come è nato il tuo amore per questa lingua?

GIUSEPPE: Beh, innanzitutto diciamo che è stata una passione in due sensi la mia; è stata in un primo momento vera e propria sofferenza, solo successivamente è stato amore per questa lingua. È stata sofferenza perché questa lingua era sì estremamente affascinante; per me però era allo stesso tempo era una lingua che non riuscivo a comprendere totalmente, lo studio in astratto della grammatica, e poi...

CONDUTTRICE: Ma dimmi, prendevi anche tu brutti voti all'inizio?

GIUSEPPE: Eh, sì, all'inizio ne ho presi molti di brutti voti...

Poi tutto [l'amore per il latino] è nato grazie a un testo particolare che è stato scritto da un professore danese, il professor Ørberg*, ed è tutto cambiato anche grazie a delle persone, innanzitutto la mia professoressa del liceo e poi altre persone, due professori universitari, professor Carciotto e prof. Consoli, che sono miei amici e miei maestri che hanno messo su a Catania un circolo latino e noi ci riuniamo una volta alla settimana per esercitarsi e per parlare in latino tutti insieme.

CONDUTTRICE: E questa radio catanese che avete, di che cosa parlate? In latino, in lingua latina proprio?

GIUSEPPE: Sì, noi facciamo un notiziario in latino, trasmettiamo le notizie del giorno. È nato su un'idea del Professor Carciotto che ha studiato in Finlandia dove c'è un radiogiornale in latino che viene trasmesso dalla Yle, che è la radiotelevisione nazionale.

CONDUTTRICE: Ci fai vedere come fate a tradurre le parole nuove, le parole che in latino non ci sono?

GIUSEPPE: Si tratta in effetti di un falso problema questo dei neologismi perché anche i romani si trovavano di fronte a questa "verborum egestas", proprio una mancanza di parole. Noi utilizziamo gli stessi principi. Per esempio "telenovela" la possiamo tradurre in latino come "fabula televisifica". Televisione è "televisionarium"; "night-club" è una "taberna nocturna". Un "check-up" non è altro che un "controllo di tutto il corpo", cioè "totius corporis inspectio", dal verbo "inspicere" che significa "controllare".

CONDUTTRICE: Beh, io gli darei un dieci a questo ragazzo.

DOTTOR VESTITA: Sarebbe interessante anche dire, già che ci siamo, che anche il greco è fondamentale: "televisione", "telegrafo", "telescopio"... spiegare ai bambini che "tèle" vuol dire "lontano" e quindi "telegrafia", "televisione" sono tutti dello stesso suffisso che vuol dire "da lontano".

CONDUTTRICE: Chissà che abbiamo fatto cambiare idea a qualche ragazzo che odia il latino...

* Hans H. Ørberg (1920年-) ハンズ・エルベルグ教授はラテン語教育のナチュラル・メソッドの一つと言える「メトド・ナトゥーラ」(Metodo Natura)の考案者である。エルベルグ教授が考えた、このラテン語の帰納的教育法・教授法は、*Lingua Latina per se illustrata* (Domus Latina 出版社、1990-1991年)と題する彼の著名なラテン語の教科書で使用されていて、このラテン語コースは2巻(vol. I、入門編: *Familia Romana* 及びvol. II、応用編: *Roma Aeterna*)によって構成される。この10年間、エルベルグ教授の新メソッドはイタリアの高等学校におけるラテン語教育者の中で注目的になっていて、フランス、スペインなどのラテン語教育関係者の中でも革新的な教育法として評価を受けている。